

池田健先生について

駒沢大学教授 石 井 彰次郎

駒沢大学は、その前身を文禄元年（1592年）——太閤秀吉の全国統一の2年後——江戸駿河台吉祥寺に創立された旃檀林にもとめられるほどに古い歴史をもつ学校である。旃檀林というのは、曹洞宗による禅の実践、仏教の研究、漢学の振興のため設立されたものである。今日みられるような大学となったのは、大正14年（1925年）に、大学令により「曹洞宗大学」から「駒沢大学」に改称され、そして寺院の子弟以外に一般に広く門戸が開放されてからである。とくに第二次世界大戦後の発展は目覚ましく、昭和24年（1949年）の学制改革のもと新制大学として、仏教学部、文学部、商経学部の三学部で発足し、そして昭和44年（1969年）には、わが経営学部が設立されて、文科系総合大学としての体制を整えたのであった。

経営学部は、その後、研究・教育の質的・量的発展を求めて、大学院や第二部を設立し、また多くの先生方をお迎えしたのである。池田先生が駒沢大学に来られたのは昭和46年（1971年）であり、この年の夏の教授会で初めて先生にお目にかかったのであった。温厚・篤実で、いかにも気品のあるお姿に接して、何ともいえぬ清々しさを感じたのは恐らく私一人ではなかったと思われる。あれから20年、学部の発展に測り知れないほどの御尽力をなされ、そしてこのたび御定年を迎えられた先生に対して、われわれ一同心からの感謝を捧げるものである。

思えば先生は、大正、昭和、平成の三世代を生きてこられたのである。先生は、当時、内務省（現在の自治省）から宮城県県庁に出向されていた池田秀雄および八重子御夫妻の長男として、大正5年（1916年）8月に仙台市でお生まれになっている。この年は第一次世界大戦中でもあり、世界は騒然としており、

国内では吉野作造先生の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という論文が中央公論誌に発表されて世論を沸かせ、また河上肇先生の「貧乏物語」の「大阪朝日」での執筆や、友愛会磐城連合会の設立等がみられたのである。内務官僚としての父親の仕事も多忙を極められ、その任地も転々とし、それに伴って先生も岐阜、広島、京城（現在のソウル）等をまわり、そして祐天寺の現在の住居に到着されたのであった。ここは祐天寺という寺を中心として発達した街で、戦前には造園業を営む者が多く牧歌的雰囲気漂わせていて、戦火にもあわず、今でも住宅街としての閑静なたたずまいを残している所である。ここから先生は、旧制府立高校尋常科・高等科に通われたのであった。通学途上に長々と寝そべる蛇をかまったり、竹藪ではしゃいだりして、道草をくって通ったこの時代に、細事にこだわらず、おおらかで気楽な先生の性格の一端が培われたのではあるまいか。

府立高等学校という学校は、その頃盛んに設立された七年制高校の一つであって、尋常科に入る入学試験は難しく倍率も高かったが、入ってしまえば高等科（旧制高校）へ無試験で入れたのである。そして昭和13年（1938年）に、東北帝国大学法文学部に入学されている。この大学は、高等教育の東京への過度集中への対策として設立され、比較的自由的な学風がみられたのであった。しかしながら昭和12年（1937年）にいわゆる日支事変が始まり、翌年には国家総動員法が公布され、軍国主義の進行は、大学をもその圏外に置かなかつたのであった。第二次人民戦線事件として大内兵衛教授グループの検挙とか、河合栄治郎教授の著書発禁、ついで休職がなされ、東北大学でも数名の教官の逮捕がみられたのであった。青年多感な時代、思いを高ぶらせつつも、一心に勉学に勤しんだ先生は、昭和16年（1941年）に卒業して、日本銀行に入り、そして爾来今日に至るまでの学究生活のスタートをきられたのであった。

日本銀行では主として調査・研究畑を歩まれ、その最終ポストは、「調査局外国調査」である。

当時、日本銀行では、第一次大戦後の国際経済の混乱が第二次世界大戦の主要原因の一つであったとの考えが支配的にみられ、かくて戦後の国際経済の秩

序の回復には、とくに国際金融の協力ということが重要視され、各国政府および中央銀行において、これに関する熱心な研究・調査が行なわれたのであった。先生もこの風潮にのって研究を進められたのである。

そもそも国際通貨は、異種通貨間の取引を扱うものであって、この種の研究は、多数の国家が集まっているヨーロッパでは古くから行なわれてきており、ことに最近では、多数国通貨相互間の取引を当然の事のように取扱う国際金融の国内化現象がみられるに至っている。ところが日本やアメリカのように多くの異種通貨の取引が行なわれていない国での研究は、どうしても遅れがちとなる。それだけにこの方面に関する先生の研究は、貴重なものといえるのである。昭和 39 年（1964 年）に東北大学から、「国際金融協力論」というテーマで経済学博士の学位を授与され、その後、青山学院大学大学院や東北大学経済学部にて非常勤講師として招聘され、直接学生の教育に当られ、わが経営学部においては、「国際金融論」の講義を担当され、研究・教育一途の人生を歩まれたのであった。

日本銀行に奉職以来、先生は常に変動する国際金融事情を追求し、倦むことなく研究を続けて数々の優れた業績を発表され、また他面、若い学生の教育に情熱を傾けられたのであった。恐らく学校を離れられても、先生のこの一本気は衰えることはないのではあるまいか。嘗て、先生の御趣味は何ですかとお尋ねしたところ、読書ですとの御返事があった。ミステリーものですか、あるいは時代小説類ですかと再度尋ねたところ、少々困ったような顔をなされて、経済・金融関連の本ですとお答えになられた。書に埋没し、そしてたしなみのよいお酒好きの先生に対して、何事も過ぎぬよう、好きなものを抑えるよう配慮するのは大変な事であろう。高血圧や糖尿病を克服して今日健康を保持しておられるのも、ひとえに奥様の内助の功が大なのではあるまいか。先生は幸せな人であるとおつくづく思われる。明るくおおらかで、そしてひたすら学究の徒である先生がいま学校を去られることは、先生の人柄に触れることのできた者ならば何人といえども、深い惜別の情を禁じえないであろう。

月並みなしめくくりながら、先生のより一層の御健勝と、あわせて筆硯の御

多様を心からお祈りする次第である。

平成3年2月10日